

令和6年度 西条市の教育に関するアンケート調査 総まとめ

(1) 小学校や中学校がどのようなところであるべきか

小学6年生保護者、小学校教職員、市民の結果から、小学校は「子どもが基礎的な学力を身に付けるところ」であり、かつ「子どもが多様な考えに触れ、資質や能力を伸ばしていくところ」だという意見で一致しました。しかしながら、市民と保護者は小学校に対して子どもの基礎学力向上を強く求める傾向がみられるのに対して、教職員は子どもの基礎学力向上と同程度に子どもの資質や能力を伸ばしたいと考えている傾向があることから、双方の間に考え方の違いが生じているのではないかと受け止めることができます。

また、中学3年生保護者、中学校教職員の結果から、中学校は「子どもが多様な考えに触れ、資質や能力を伸ばしていくところ」であり、かつ「子どもが基礎的な学力を身に付けるところ」だという意見で一致しました。保護者、中学校教職員が概ね中学校のあり方に対して同じ考え方を有していると受け止めることができます。

(2) 小学校や中学校で身に付けることが大切だと思う能力や態度

小学6年生保護者、小学校教職員、市民の結果から、小学校では「自ら学び、考え、主体的に行動する力」を身に付けることが最も大切であり、かつ「教科の基礎学力」を身に付けることが大切だという意見で一致しました。保護者と教職員の傾向が概ね一致していることから、保護者と教職員の双方が、子どもの基礎学力の習得が大切だと考えているとはいえ、子どもが自ら学び考える力を身に付けることが最優先だと考えていると受け止めることができます。

また、中学3年生保護者、中学校教職員の結果から、中学校でも「自ら学び、考え、主体的に行動する力」を身に付けることが大切だという意見で一致しました。優先順位に違いがあるものの、「教科の基礎学力」「生き方や進路について考える力」を身に付けることも大切だという意見で一致しており、教職員と保護者の双方が、子どもが自ら学び考える力を身に付けることを大切にしつつ、子どもの基礎学力の習得や将来の生き方について考える力を身に付けることも大切だと考えていると受け止めることができます。

(3) 大切だと思う能力や態度を育むために今後力を入れるべき施策

小学6年生保護者、小学校教職員、市民の結果から、優先順位に違いがあるものの、小学校ではコミュニケーション能力や主体性を高める教育の推進に力を入れるべきということで意見が一致しました。また、教員は教員自身の事務量軽減によって子どもと向き合う時間を確保すべきと考えていることから、教育現場が求められる理想と教員の事務量過多という現実とのギャップが大きいのではないかと受け止めることができます。

また、中学3年生保護者、中学校教職員の結果から、優先順位に違いがあるものの、中学校においてもコミュニケーション能力や主体性を高める教育の推進に力を入れるべきということで意見が一致しました。小学校と同様に、教員は教員自身の事務量軽減によって子どもと向き合う時間を確保すべきと考えており、教育現場が求められる理想と教員の事務量過多という現実とのギャップが大きいのではないかと受け止めることができます。

(4) 小学校や中学校の学習環境を考える上で重視すべきもの

小学6年生保護者、小学校教職員、市民の結果から、小学校では「学校の教員の人数や質が充実し児童一人ひとりに行き届いた教育が受けられる」環境を重視すべきだという意見で一致しました。また、「集団の中でコミュニケーション能力を身に付けやすい」「クラス内の仲間意識が生まれやすい」と子どもが集団の中から学ぶことができる環境を重視する意見についても概ね一致しましたので、保護者、小学校教職員、市民が概ね小学校の学習環境のあり方に対して同じ考え方を有していると受け止めることができます。

また、中学3年生保護者、中学校教職員の結果から、中学校においても「学校の教員の人数や質が充実し児童一人ひとりに行き届いた教育が受けられる」環境を重視すべきだという意見で一致しました。小学校同様、「集団の中でコミュニケーション能力を身に付けやすい」「クラス内の仲間意識が生まれやすい」と子どもが集団の中から学ぶことができる環境を重視する意見についても概ね一致しましたので、保護者と教職員の双方が、概ね中学校の学習環境のあり方に対して同じ考え方を有していると受け止めることができます。

(5) 図書館の利用状況

小学6年生保護者、中学3年生保護者の結果から、小学6年生と中学3年生のいずれも半数を超える方が図書館を利用する状況にあり、特に、中学3年生よりも小学6年生が多く利用する状況にあります。市民のいずれの年齢も、小学6年生より利用状況が低いことから、本市の図書館を最も利用しているのは小学生であると受け止めることができます（延べ利用者数ではなく、年齢別にみた場合の利用率という観点）。

なお、小学校教職員、中学校教職員の結果から、教職員における図書館の利用頻度が高く、特に小学校教員の利用頻度が高いことがわかります。

(6) 図書館の利用環境に対する満足度

小学6年生保護者、中学3年生保護者の結果から、小学6年生と中学3年生のいずれも図書館の利用環境に満足する状況にあり、特に、中学3年生よりも小学6年生がより満足する状況にあります。また、市民においても、全体的に図書館の利用環境に満足する状況にあり、30～69歳は7割以上が利用環境に満足しています。

なお、小学校教職員、中学校教職員の結果から、教職員は図書館の利用環境に満足する状況にあることがわかります。

(7) 主に利用している図書館

小学6年生保護者、小学校教職員、中学3年生保護者、中学校教職員、市民の結果から、共通して西条図書館を主に利用する傾向が高くなりました。

(8) 図書館を利用した主な目的

小学6年生保護者、中学3年生保護者の結果から、小学6年生と中学3年生はともに本を借りる目的で図書館を利用する傾向にあり、中学3年生は学習コーナーで勉強する目的で利用する傾向もみられます。

一方で、市民の結果から、すべての年齢において本を借りる目的で図書館を利用する傾向にありますが、年齢が低くなるにつれて本を借りる以外の目的で利用する方が多くなる傾向がみられました。

(9) 図書館の利用が役立っていると感じる点

小学6年生保護者、中学3年生保護者の結果から、「子どもが読書に親しみ、生きる力を育む機会が得られている」「学校での課題や宿題に役立つ知識・情報が得られている」と感じており、図書館が子どもの発達や教育に重要な役割を担っていると感じる傾向がみられました。

また、中学校教職員は上記の保護者と同様の傾向がみられますが、小学校教職員については、趣味や娯楽、仕事に役立つ知識・情報が得られていると感じており、図書館が生活の中で必要な情報を得るための重要な役割を担っていると感じる傾向がみられるなど、小学校と中学校の教職員で感じ方に違いがみられました。

(10) 図書館に関連して今後期待する点

小学6年生保護者、小学校教職員、中学3年生保護者、中学校教職員、市民の結果から、「貸出および閲覧書籍の充実」を求める声とともに、特に若い方を中心に「図書館以外で貸出や返却が行える場所の整備」や「学習の場のさらなる充実」を求める声が多くなりました。

さらに、丹原地区や小松地区で「学習の場のさらなる充実」を求める声があるなど、地区や図書館、年齢等によって図書館に期待する点に違いがみられました。

(11) 公民館の利用状況

小学6年生保護者、中学3年生保護者、市民の結果から、小学6年生保護者の公民館の利用頻度は比較的高いものの、中学3年生保護者と市民は、公民館を利用していない方が半数以上を占め、利用頻度が低い状況にあります。また、小学校教職員、中学校教職員の結果から、教職員における公民館の利用頻度は比較的高い状況にあります。

なお、市民においては、年齢が高くなるにつれて公民館の利用頻度が高くなる傾向がみられるものの、利用頻度が最も高い70代でも利用者の割合は50%を切っており、全体的に利用率の低さが目立ちます。本市としては、市民全体の公民館利用をいかに高めていくのかという点が課題であると受け止めることができます。

(12) 公民館の利用環境に対する満足度

小学6年生保護者、中学3年生保護者、市民の結果から、どの対象においても公民館の利用環境に対する満足度は比較的高くなる傾向がみられます。また、小学校教職員、中学校教職員の結果から、教職員はいずれも利用環境に対する満足度は高いものの、小学校教職員と比較し、中学校教職員の満足度はやや低くなる傾向がみられました。

(13) 公民館活動を通じて身に付けた知識・技術

小学6年生保護者、中学3年生保護者、市民の結果から、公民館活動で「人間関係を広げ、仲間づくりにつなげている」方が多い一方で、「特に何も身に付けていない」方も多いという傾向で一致しました。また、年齢が高くなるにつれて、公民館活動を通じて「趣味や特技に活かしている」「健康の維持、増進に役立っている」方が多い傾向がみられます。本市では、年齢によって公民館活動を通じて身に付けた知識・技術が異なるとともに、高い比率で公民館活動を通じて特に何も身に付けていない方がいると受け止めることができます。

なお、小学校教職員と中学校教職員の結果から、教職員は公民館活動で「人間関係を広げ、仲間づくりにつなげている」「まちづくり、地域づくりに活かしている」方が多い傾向がみられます。

(14) 公民館に期待する事業

小学6年生保護者、小学校教職員、中学3年生保護者、中学校教職員、市民の結果から、共通して公民館に「地域の防災に関する事業」「子どもの安全・安心な居場所づくりや体験活動に係る事業（放課後子ども教室）」「子ども学習支援活動に関する事業（地域未来塾）」を期待する方が多い傾向で一致しました。年齢やお住いの地区によって多少の違いはありますが、防災や子育てが地域住民にとって大きな関心事ではないかと受け止めることができます。

(15) 取り組んでいる生涯学習、今後取り組みたい生涯学習

小学6年生保護者、中学3年生保護者、市民の結果から、保護者が取り組んでいる生涯学習として「子育て・教育に関するもの」や「家庭生活に役立つ知識・技能に関するもの」が多く、今後取り組みたい生涯学習の内容についても同様の傾向がみられます。また、市民は、「家庭生活に役立つ知識・技能に関するもの」「趣味や芸術に関するもの」「健康・医療の知識に関するもの」が多く、今後取り組みたい生涯学習の内容についても同様の傾向がみられます。保護者と市民は、日常生活の中でも特にそれぞれの身近なテーマに関心が高いことがわかります。

小学校教職員と中学校教職員の結果から、小学校教職員が取り組んでいる生涯学習は「文学、歴史、自然科学などの教養に関するもの」や「福祉・障がいに関するもの」が多く、中学校教職員は「スポーツに関するもの」や「趣味や芸術に関するもの」が多い傾向がみられました。取り組んでいる生涯学習の内容に違いはあるものの、今後取り組みたい生涯学習として「趣味や芸術に関するもの」「健康・医療の知識に関するもの」が多い傾向でいずれも一致しました。

(16) 生涯学習を盛んにするために力を入れたらいいと思うこと

小学6年生保護者、中学3年生保護者、市民の結果から、保護者は、生涯学習を盛んにするために「生涯学習講座の内容を充実させる」「スポーツ施設の整備」に力を入れたらいいと考える傾向があり、市民も「生涯学習講座の内容を充実させる」ことに力を入れたらいいと考える傾向がみられます。また、小学校教職員と中学校教職員の結果から、教職員は「スポーツ施設の整備」に力を入れたらいいと考える傾向が多いことで一致しました。

(17) 芸術文化に触れる機会の充実度

小学6年生保護者、中学3年生保護者、小学校教職員、中学校教職員、市民の結果から、全体として「映画や漫画・アニメなどのメディア芸術」に触れる機会が最も充実しており、次

いで「小説や詩などの文学」「コンサートや合唱などの音楽」に触れる機会が充実している傾向がみられました。また、小学校教職員および中学校教職員は、市民と比較して「コンサートや合唱などの音楽」や「絵画や彫刻・陶芸などの美術」に触れる機会が充実している傾向がみられます。

(18) ふるさとの歴史文化に対する誇りや愛着度

小学6年生保護者、中学3年生保護者、市民の結果から、小学6年生および中学3年生におけるふるさとの歴史文化に対する誇りや愛着度が著しく低いことがわかります。

また、小学校教職員、中学校教職員の結果から、市民と比較して教員におけるふるさとの歴史文化に対する誇りや愛着度が高い傾向がみられます。

(19) ふるさとの先人の教えに学ぶ機会の充実度

小学6年生保護者、中学3年生保護者、市民の結果から、小学6年生、中学3年生、市民のいずれもふるさとの先人の教えに学ぶ機会が充実していないと感じる傾向がみられました。

(18)でも同様の傾向がみられたことから、ふるさとの歴史文化に対する誇りや愛着度、先人の教えに学ぶ機会の充実度を向上させていくために、現状を把握し、要因を分析していく必要があると考えられます。

また、小学校教職員、中学校教職員の結果から、市民と比較して小学校教員および中学校教員は比較的ふるさとの先人の教えに学ぶ機会が充実しており、特に小学校教員が充実している傾向にあります。

地区別では、小松地区で多くなる傾向にあり、お住まいの地区によっても大きな違いがあると考えられます。